



## 聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか

イエスのご死去を朗読でたどっていきました。イエスを死に追いやる人々の中で働く悪の力は、その人の正しい判断力までも奪い去りました。大祭司アンナスは、イエスを縛ったまま大祭司カイアフアのもとへ送りました。カイアフアも何も手を貸さず、総督ピラトの元へ送ります。

裁判を開いて尋問したピラトは、「わたしはあの男に何の罪も見いだせない」(18・38)と言い、釈放しようと努めたのです。しかし、ピラトはイエスではなく強盗のバラバを釈放したのでした。祭司長たちにそそのかされた群衆も、心の声に耳を傾けることができませんでした。

もう一人、イエスの死に深くかかわっている人がいます。それはペトロです。ペトロは三度、イエスのことを否定しています。ペトロに焦点を当てて、今年の聖金曜日を黙想したいと思います。

イエスは宣教活動を開始するにあたり、十二人の弟子を集めました。その弟子の頭がペトロです。しかしペトロは、門番の女中の言葉に、致命的な過ちを犯してしまいます。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」(18・17) ペトロは「違う」と言ったのです。

ペトロが「違う」と言ったことは、個人の問題では済まされません。彼は弟子の代表、一番弟子だからです。ペトロが「違う」と言うならば、だれが「わたしはイエスの弟子である」と言うのでしょうか。

ペトロが「弟子ではない」「違う」と打ち消したのは、イエスがみずから選んだ弟子さえも、敵対する悪の勢力に打ち勝てなかったということなのです。それはつまり、イエスが十字架にかけられていのちをささげなければ、どんな人間も自分を救えない、自分だけではなく他の人をも救えないということなのです。弱く、貧しい、愚かな人間を救うために、イエスの十字架上の死がどうしても必要だったのです。

イエスの最期の場面で、十二人の弟子たちがみな「わたしたちはイエスの弟子である」と声を上げていたら、出来事はさぞ変わっていたことでしょう。けれども、それは実現しませんでした。かろうじてイエスのそばにとどまった「愛する弟子」も、ただ黙ってイエスの最期を見届けることしかできなかったのです。

イエスは、十字架の上でいのちをおささげになりました。今、わたしたちにも門番の女中は問いかけています。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」残念ながら、わたしたちも場合によっては自分が弟子であることを「違う」と打ち消してきました。こんな弱いわたしたちを、イエスさまは黙って背負い、赦し、救ってくださいます。今はただ、感謝して十字架上のイエスを礼拝しましょう。

このあと、十字架の礼拝の儀が執り行われます。一人ずつ十字架の前で深々とお辞儀をし、礼拝をささげます。弟子であることを打ち消したわたしをそれでも愛してくださる十字架上のイエスに、感謝の誠をささげましょう。